様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ４ 月 １３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４５７

研究課題名（和文）台湾における日本語文学の翻訳と受容

研究課題名（英文）Translation and Acceptance of Japanese Language Literature in Taiwan

研究代表者
李　郁惠（LEE, YUHUI）

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：８０３９９０７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は3年の研究期間中に次のようなことに取り組み、成果を上げてきた。まず、台湾における日本語作品の学術研究上の受容形態を分析し、台湾文学としての注目度を確認した。次に、日本語原文よりも中国語訳を通して読まれていることの問題点として、戦後の歴史観に制約を受けかねないことを指摘した。最後に、王昶雄という作家が1943年に書いた作品「奔流」を取り上げることにより、民族道徳的批判を避けるために作者によって意図的改稿をされた可能性や、「台湾人」「内地人」「日本人」といった固有名詞に関する翻訳がたとえ意図的でなくても本来の意味とずれている可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has been working on the following things during the research period of 3 years and has achieved results. First, I analyzed the acceptance form academic research of Japanese work in Taiwan and confirmed its attention as Taiwanese literature. Next, as a problem of what is being read through Chinese translation rather than Japanese original text, I pointed out that it can be restricted by post-war history view. Finally, by picking up the work A Raging Torrent written by Wang Chang-Hsiung in 1943 as a text, I clarified that there is a possibility that the content was intentionally revised by the author to avoid ethnic/moral criticism. And it was made clear that even if the translation is not changed intentionally, a seemingly simple proper name such as "Taiwan-jin" "Naichi-jin " "Nihon-jin" may fall out of alignment with the original composition presented by the translation method.

研究分野：日本語文学

キーワード：台湾文学　日本語作品　翻訳　中国語　日本統治時代　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

一国の文学として、同国籍を持つ作家が、構成主体をなす民族に属し、且つ国の定めた言語で書くという対称性を満たす作品がふさわしい。このような近代的国民国家観の下、たとえば「日本文学＝日本人作家による日本語作品」などといった等式があまねく敷衍され、長きにわたってまかり通ってきた。もっとも、例外もある。アフリカや中南米の中で、幾世紀にわたる植民地化の歴史から英語、フランス語またはスペイン語が浸透し、公用語として定着した国は少なくない。そのため、イギリス文学ならぬ英語文学、フランス文学ならぬフランス語文学、スペイン文学ならぬスペイン語文学が存在していることは周知のとおりである。

しかし、日本文学ならぬ日本語文学については、同じように理解することは難しい。なぜならば、日本統治を受けたアジアやオセアニアの諸地域は悉く期間が相対的に短い上、第二次世界大戦の終了に伴って日本語を退けたからだ。したがって、現在進行形としての日本語文学は、日本在住の外国人あるいは海外在住の日系人が、母語や母国語でない日本語を表現手段として自ら進んで選択する場合に限って見られる。それ以外の大部分は半世紀以上前に生産され、中でも教育制度が比較的整っていた台湾や朝鮮半島に集中していた。

さて、前者はともかく、いわば大日本帝国の歴史の一部である後者の日本語文学については、どう位置すべきなのか。この問題は、統治側の日本だけではなく、被統治側の台湾や朝鮮半島にとっても正視しづらいものがある。日本に屈した証拠となることも一因だが、日本文学と同様な、国籍と民族と言語が三位一体の枠組みを構築する上で不都合であったという面が大きい。つまり、非対称性という宿命を背負うがゆえに、日本語文学はどちら側からも突き放され、黙殺され続けてきたわけである。

そんな状況にあったものの、台湾においては、今や正の遺産として重んじられているという実にドラマチックな変化を見せた。背景の一つとして、グローバル化の進展を受け、日本語文学の体現する非対称性がむしろ現実的なものとして見直され始めたことが挙げられる。とりわけ、ポストコロニアル理論の勃興は脚光を浴びることにあずかって力があった。日本においても、同じ流れの中で封印が解かれ、日本文学の自明性を問い直すきっかけともなっているのだが、マイナーな存在にとどまっているといわざるを得ない。

なぜ台湾では主流化に成功したのか、これを理解する鍵は台湾社会の多言語状況にある。14 に分かれる先住民族のほか、福建系漢民族や広東系漢民族など、エスニック・グループごとに母語が異なる。そんな島に「国語」と称して言語同化を迫る波が 2 回も押し寄せた。1 回目は日本統治時代における日本語であり、2 回目は戦後中国国民党政府下の中国語である。そのたび困惑や反発を引き起こしたのはいうまでもないが、どの母語も正書法が確立していなかったことから、皮肉にも共通のコミュニケーション手段として役立つことになった。そしてこの事実が、母語よりも日本語で執筆することを選択した作家への理解につながったと見られる。

けれども、執筆内容まで不問に付すことは到底できない。反日の要素を含んでいれば称賛される一方、親日的な題材と思われる場合は非難の的になる。要するに、ふるいを通り抜けた一部の作品のみ、表舞台に立つことを許されたわけだ。そのふるいは、ほかならぬ、日本に続く 2 回目の外来政権が持ち込んだ中華ナショナリズムである。中で展開されている歴史観があくまで中国大陸中心のため、台湾は地理上から周縁化を余儀なくされる。事実、戦前から在住の諸エスニック・グループは、母語をはじめ、文化、経済、政治あらゆる面でサブ的な立場を強いられ、不満が鬱積するばかりだった。その反動として本土志向が高まり、より台湾に立脚した視座への転換を求める動きは後を絶たない。

日本語文学の全面的な復権は、まさしくこうした台湾ナショナリズムの気運に乗じて実現できた。多言語で培ったマルチスタイルを逆手に取ることにより、中国文学の片隅から台湾文学が独立すると、日本語文学は象徴的な役割を兼ねて再び主役の座に返り咲いた。親日反日云々の一元的尺度はもはや通用しない。いかなるイデオロギーも受け入れ、いかなるスタンスも尊重する。多様な価値の共存を前提とする土壌の上に、日本語文学の研究は今、花開こうとしているのである。

ただ、問題は、戦前生まれで日本語教育を経験した世代は老齢化し、戦後の世代は中国語教育を受け育ったため、読者層が限られている。一般的に、翻訳を通して読まれることになっているが、上述した時代背景の影響から、作品の選択に偏りがあったり、原文と食い違う部分が生じたりする可能性が大きい。それを確認することで、日本語文学の受容状況を把握できると同時に、日本統治時代に関する評価の変遷とその政治的意味を窺い知ることができる。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、戦後公用語が中国語に変わった台湾社会の中で、日本統治時代の台湾人作家の日本語文学がどのように翻訳、受容されているかを考察することである。出版状況を時代別に整理するとともに、具体的な翻訳内容に立ち入って分析する方法を通して、台湾ナショナリズムの勃興など社会情勢による影響を明らかにしたい。

３．研究の方法

本研究課題は次の 3 点を目標とている。①学術研究上における受容形態を分析し、台湾

文学としての注目度を確認する。②翻訳の出版状況を検討し、社会的認知度を把握する。③代表的な作品の原文と訳文を比較対照し、翻訳の問題点を明らかにする。

まず、①の目標に沿って、学術研究上の受容形態を調査することに取り組む。台湾文学関連学部・大学院を設置した教育研究機関を対象に、教育面ではカリキュラムの構成、研究面では学位論文の内訳を中心に実施する。

次に、②の目標に関しては、出版社や図書館の資料を収集、整理しながら、翻訳の出版状況を検討する。その上、注目度の高い作品や発行部数が多い作品を作表する。

そして③の目標に達成するために、上記の調査結果に基づき、代表的な作品を複数選定し、原文と訳文を比較対照する。異同を確認しながら翻訳の問題点を明らかにする。原文と訳文の比較にあたって、表現や意味のズレ、文脈の省略や補足、書き換えや読み替えなどを中心に行う。

４．研究成果

初年度では、計画どおりに台湾文学関連学部・大学院を設置した教育研究機関について調査を行い、カリキュラムや学位論文における日本語文学の受容形態を確認した。まず、大学院からいえば、名称は大きく 3 つに分かれる。直接「台湾文学」の名を冠する大学（成功大学、清華大学、台湾大学、中正大学、中興大学、政治大学、彰化師範大学、静宜大学）と、広く「台湾文化」を取り上げる大学（台南大学、台北教育大学、東華大学、高雄師範大学）と、「台湾語文」として言語教育に重きを置く大学（新竹教育大学、台中教育大学、台湾師範大学）がある。合計 15 カ所のうち、東華大学と新竹教育大学以外は日本統治期の文学をテーマとした科目を開講している。中でも興味深いことに、台湾人作家だけではなく、戦前台湾在住の日本人作家の作品も注目されているようである。また、同時期の歴史や政治、社会に対する関心も高いようである。一方、「台湾文学」とはっきりと打ち出した学科は真理大学の 1 カ所のみだが、同じ真理大学や台中教育大学、中山医学大学、聯合大学の「台湾語文」も関連するものと思われる。ほぼすべての大学で日本語が必修となっている上、日本統治期の文学が履修科目の中に取り入れられている。成立時期に関しては、大学院と同じく、1997 年に始まり、2004 年、2005 年に集中している。これは 20 世紀末から 21 世紀初頭までの間、中国一元化を退け、台湾ナショナリズムが著しく台頭した結果だったともいえる。なお、台湾の場合、学位論文の提出が大学院以上に課されるため、収集作業は主に修士論文を対象とした。その中から日本統治期に焦点を当てたものをピックアップし、文学関係か否か、また日本語作品か否かで細かく分類した。

第 2 年度では、初年度の調査結果を整理し、発表に向けてまとめることに努めた。その成果の一部を、2016 年 11 月 5 日に台湾の世新大学で開催されたシンポジウム「世新 60【日本学】国際学術研討会」で「台湾における日本語文学の受容と問題点」として口頭発表した。具体的には、まず日本の状況を分析し、それとの比較を通して台湾における評価の動向を把握した。次に、学術研究上の注目度を確認するために、近年台湾ナショナリズムの気運に乗じて相次ぎ新設された台湾文学研究科の学位論文を調査した。日本統治時代の日本語作品をテーマに取り上げた論文の本数が全体に占める割合から、台湾文学の一部として認められていることが分かった。しかし、テキストの引用に関しては、日本語原文よりも中国語訳本を底本としているものがほとんどである。このことは、言語の断絶により読者がほぼ不在となったという日本語文学の現実を物語っているが、翻訳をめぐる次の問題点が残る。つまり、創作がデリケートな時代で行われただけに、新しい歴史観に沿うべく原作者や翻訳者によって加除修正された可能性がある。ただ逆にいえば、そこから政治的文脈の変遷をたどることができるという点で日本語文学の重要性を強調した。

最終年度では、多くの訳者に翻訳されており、高い注目度を誇る点から、王昶雄という作家の「奔流」という作品を取り上げ、翻訳の問題について考察した。方法としては、まず、1943 年 7 月『台湾文学』3 巻 3 号に発表された当時の日本語版本と、同年 11 月大木書房刊行の『台湾小説集』に収録された日本語版本の間に顕著な差異がないことを確認した。次に、1979 年から 2002 年の間に出ている合計 7 バージョンの中国語版本の中には原作者の改訂を経て内容的に大きく異なるものが含まれていることに注目した。これについては、先行研究にも指摘されているように、作者自身が「皇民作家」という民族道徳的批判を避けるための保身策であろうが、ここから訳本が意図的に変更される可能性を 1 つ目の問題点として挙げた。一方、意図的ではないにしろ、歴史用語や地名など変更されるはずのない固有名詞でも、訳し方によって原作の提示した構図とずれてしまいかねない可能性もある。この 2 つ目の問題点について、「台湾」、「内地」、「日本」、あるいは「台湾人」、「内地人」、「日本人」といった具体的な訳例を示しながら明らかにした。この成果は、「日本語作品の翻訳をめぐる問題―王昶雄「奔流」を例に」として、2017 年 10 月 29 日に韓国の東国大学で開催された「東アジアと同時代日本語文学フォーラム第 5 回ソウル大会」で口頭発表をし、2018 年 3 月に『広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅲ　文明科学研究』12 号（1-10 頁）に刊行されている。なお、2017 年 6 月 11 日に日本中国語学会 2017 年度第 1 回中国支部例会で発表した「台湾文学の使用言語について」も本研究課題の成果の一部である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①李　郁蕙、日本語作品の翻訳をめぐる問題―王昶雄「奔流」を例に、広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅲ　文明科学研究』、査読有、12 号、2018、1-10
DOI：10.15027/45243

〔学会発表〕（計３件）
①李　郁蕙、台湾における日本語文学の受容と問題点、世新 60【日本学】国際学術研討会、台湾・世新大学、2016/11/5
②李　郁蕙、台湾文学の使用言語について、2017 年度第 1 回中国支部例会、日本・広島大学、2017/6/11
③李　郁蕙、日本語作品の翻訳をめぐる問題―王昶雄「奔流」を例に、東アジアと同時代日本語文学フォーラム第 5 回ソウル大会、韓国・東国大学、2017/10/29

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
李　郁蕙（LEE, Yuhui）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：80399071

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）